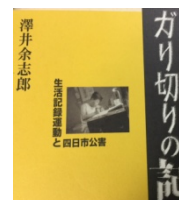


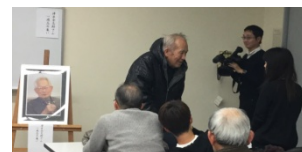
澤井余志郎さんのご家族

12月17日の澤井余志郎さんを偲ぶ「一周忌」の集いに参加して、なんだか澤井さんのご家族のことが気になった。昨年読んだ澤井さんの『ガリ切りの記』を取り出し、ご家族に関係する一部を抜き出してみた。下の写真は集いで、原告の野田之一さんが澤井さんのご家族にお礼の言葉を述べられたところだ。



公害裁判の頃、いつも私は、帰りはすでに子どもが寝ている時刻で、朝は子どもが寝ているうちに出かけていたので、たまに普通の時間に帰ると、就学前だった二人の子どもが遊んでもらえると喜んで、「お父さんが帰って来たよ」と母親に注進に行く。母親は子どもに、「誰々ちゃんのお父さんも誰々君のお父さんも、いつも明るいうちに帰ってくるでしょう、うちのお父さんも早く帰るのが当たり前なのに、いつも遅く帰ってくるのよ」と子どもに話すが、子どものほうは、うちのお父さんは遅く帰るのが当たり前と思っているようだった。妻は、「外面だけが良くて、うちのことは何もしない困ったお父さんだ」とよく子どもに愚痴をこぼしていた。

しかし、第三コンビナートの埋め立てと誘致に反対するビラまきで、「地区労をクビになるかもしれない」と私が妻に言うと、「いいよ、私が働いて食べさせてやるよ」と、本気とも冗談ともとれる言いようで、妻は、隣の家の奥さんに誘われて保険のセールスに出るようになった。



公害訴訟判決15周年の1987年7月24日、日弁連の公害・人権委員会は、判決後の四日市における公害患者の健康状態や、行政などの対応についての調査研究の会を磯津公会所でもった。会の途中、原告の野田之一さんに、私は廊下の隅へ呼ばれた。「公害で名を上げたエライさんで、今もわたしらの味方になっている人っているか？ わしらはエライさんに利用されたけど、おかげでようになった。でも、今じゃあ、エライさん方も企業や行政に利用され、わしらをいじめるようになった。いったいどうなつとるんや、もう、わしらは利用価値がないっていうことか？」



「わしもその一人で」と私は言った。「あんたは違う」。そして、娘のほうを向いて、「お嬢ちゃんとお父さんにいつも世話をかけるんで、頭の毛が白くなっちゃってな。ごめんしてや」と野田さんは言ってくれた。会の帰り道、娘には、「野田さんにああ言ってもらうと、うれしいやろう」と冷やかされた。

(2016年12月27日)